

保育の現場から

子どもの姿が語るもの

— 四月・三歳児・女児A子の姿を通して —

山田 徹志

はじめに

保育の中で「子どもと共に生活し、気づくこと」。

それは、「子どもの姿には、私が思う以上に隠されたメッセージがある」ということです。そう感じさせるエピソードを、実際の保育の中から紹介していきたいと思えます。

言葉ではないものが語るもの

四月、朝、登園時、保護者に「行ってきます」と言

い、自分から母親から離れ保育室に入る女児A子。A子は登園後、私の背中に抱きつき泣き出しました。私は、「何で泣いているのか？」と内心で疑問を抱きながらA子の姿を追うことになりました。約一〇分間、A子は私に抱きつき泣き続けました。A子が私の背中では泣く姿に、私はA子に対する愛しさを感じずにはいられませんでした。しばらくして、A子は自分で泣き止み、無言で私の元を離れていきました。

このA子の抱きつきながら泣き、しばらくして保育者の元を無言で離れるという行動は、二週間ほど、毎

日続きました。

しかし、二週間を過ぎるとビタリとその行動はなくなりましたが、私は、A子の温もりを朝背中で感じるこのできないことに少々の寂しさを覚ええました。一方、A子は笑顔で登園すると、私に突然「あなたのお名前は何？」とひと言尋ねてきました。

A子が泣くことの真意は、むしろA子本人にしかわかりませんし、A子自身にとってもわからなかったことであると思います。不安で泣いていたのか。何か嫌なことが実際に登園までにあるのか……。保護者とも話す機会をもつもののその理由はわかりませんでした。ただ、A子の姿が二週間で変わったことは確かであり、A子がその後、保育者に対して抱きつきながら泣くことはなかったのです。A子の姿が変わるまでの過程には何があったのでしょうか。

なぜ、A子は抱きつくのか。おそらく、それはA子が全身を使って私を認識しようとしていたのではない

かと考えます。実際にA子が自分で他者の体に触れ、その温かさや匂いや質感など多くの情報を五感で感じ取り、私の存在を確かめていたのではないでしょう。毎日、繰り返し私の体の同じ箇所に触れ、ある程度の時間が経過すると離れていく。この行動をする中で、A子は「ここに来ればこの人がいる」ということを確かめ、ある程度の時間をかけ、自分の心の安定を図っていたのだと感じます。

A子は、自分の気持ちの切り替えを行うために、登園後この行動を無意識に行っていたのではないでしょう。何度も相手に触れ、その存在を確かめ、自分の感情を他者にさらけ出す。たとえるならば、乳児と親との間で形成するアタッチメント（愛着形成）に似た作業のようにです。まさに、「信頼関係」の生まれなのだと思います。この信頼関係が「あなたがお名前は何？」というA子の、保育者に対して自らが働きかける姿を生んだのだと考えると同時に、A子の姿の変化

から、子どもと保育者との間に生まれる信頼関係が子どもの自己を発揮するうえでも大きな働きがあるのだと感じさせてくれます。

では、本当にA子の姿の変化は信頼関係の形成だけにあったのでしょうか。そう考えさせられたのは、この出来事と並行してA子の「遊び」にも大きな変化が現れてからでした。A子の遊びの変化が、A子に対する私の理解をより深いものにしてくれました。

積み木トイシ

↳ A子の遊びの変化から

入園当初のこの時期、私の園では保育室に幾つかの遊びのコーナーを設けて子どもたちが自分で好きな遊びを行えるような保育室環境をつくります。

登園後、まだ、A子が泣いていた時期のことです。

A子は泣き止んだ後、保育室を歩き回っていました。しばらく保育室を歩き回ると、井形ブロックや油粘土

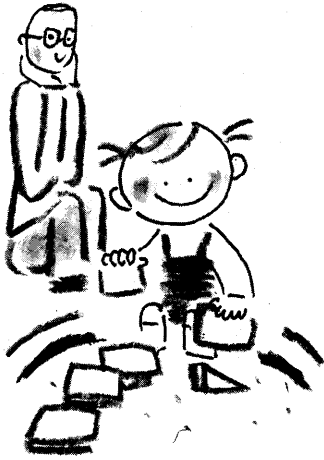
などさまざまな遊びコーナーに自分から足を運び椅子に座り遊びの準備をするのですが、ほとんど座っているだけで遊ぼうとはしませんでした。私はA子に「こんな遊びがあるよ」と声をかけてみたり、遊びコーナーに座ったときに共に遊んでみたりもしました。

しかし、A子の応答はなく、私が隣に座るとすぐに別の遊びコーナーに移っていきました。私は、A子が自分の遊びたいものを繰り返し遊びコーナーを回ることで見つけようとしているのだと考え、A子の姿を離れた距離で見ることがしました。A子の遊びコーナーを転々とする姿は二週間ほど続きました。

そして、A子が登園後、保育者に抱きつきながら泣くという行動を行わなくなったのとほぼ同時期に、A子は積み木のコーナーから移動することなく一つの遊びを繰り返し行うようになりました。私は、A子の横に座りA子の様子を伺いながら、A子に働きかけることなく卓上積み木で遊んでみました。するとA子は、

何やら独り言を繰り返して何度も積み木で遊んでいたのです。

A子は「和式です。洋式です。トイレ流すのジャー」と独り言を発しながら積み木で作ったトイレを壊してはまた作りを繰り返していました。私は初め、A子が積み木を使ってトイレを作るといふ遊びの中で、自分の作りたいと思うものを形にすることにおもしろみを感じているだと考えました。A子が遊びコーナーの中から自分で積み木遊びという遊びを見つけ出し、その



「遊び」におもしろみを見いだしたことがA子の自信にもなり、登園することの目的につながっていったかのように思いました。つまり、A子が泣きやんだ姿の背景には遊びの充実があったからだと考えたのです。しかし、A子の遊びの変化に対しての私の考えは、A子のある行動から変わっていきました。

積み木トイレのメッセージ

A子が積み木遊びをするようになり、間もなくのことです。トイレに行つて用を足し終わると「シッコでた！ ふいて流した！ 幼稚園のトイレは和式だよ！」と私にたびたび報告するようになりました。幼稚園のトイレは洋式ですが、オマルのような形状をしており、確かにA子が言うように和式トイレに見えるのです。また、この遊びをする以前、A子が幼稚園でトイレに行く姿はありませんでした。A子の積み木トイレを作る姿は、登園初日から三週間後になくなりま

した。同時に幼稚園でトイレを行った後の報告がなくなりました。

後に、A子の母親にトイレの積み木遊びの様子とトイレに行った後に発した言葉について報告すると、A子の母から「幼稚園でトイレ行くけど出ないの」と、A子が時どき家で話していたことも知ることができました。

A子は幼稚園でのトイレに抵抗があり、それを自分の力で乗り越えたことに自信をもち、それがA子の登園する姿を変えていったのではないのでしょうか。つまり、A子が積み木でトイレを作っていた理由は、幼稚園のトイレに行くという生活のイメージを照らし合わせながら行われた遊びだったのではないかということだと思います。

A子の変化の真意

A子の積み木遊びが幼稚園のトイレに対する不安に

結びついていたとするならば、それは、「遊び」と「生活」との関係性は極めて密接であることを示しているのだと考えられます。A子が幼稚園のトイレに行くという不安を乗り越えたことが積み木遊びのA子の姿に結びついたのではないのでしょうか。

A子の変化の真意は「生活」の中にこそあったのではないのでしょうか。何故たゆえに「生活」中であつたのか。それは、A子の「積み木遊び」という自己活動の中の幼稚園のトイレに行くというA子の「生活」における内面の課題が表現されていたと考えるからです。だとすると、A子にとって「遊び」も「生活」の一部であり、「生活」も「遊び」の一部だとは考えられはしないのでしょうか。A子の姿を追ううえで、少なくともA子の変化の過程が生活と遊びが相互に作用し合っていたのではないのでしょうか。

つまり、A子が幼稚園でトイレに行くということへの不安を、「遊び」「生活」を通して解消していったの

だと考えます。また、A子と私の間において、言葉ではなく体で感じ互いの存在を確かめ合うことで生まれてであろう信頼関係は、A子が幼稚園でのトイレに対する不安を自分で乗り越えようとする心の土台となったのではないかと感じます。

おわりに

A子の姿を追うことで、見えてきたA子の思い。ここに、言葉はほとんど存在しませんが、日を追うごとに変わっていくA子の姿にA子の思いは込められていたのだと感じます。

保育の中で、子どもの姿に隠されているメッセージはさまざまな場面に存在すると思います。本稿で焦点を当ててきたA子について言えば、「泣く」という目につきやすい行動から保育者側も子どもの姿に注意がいきやすかった事例だと思えます。

しかし、日々の保育の場面では、ふとした子どもの

ひとと言や小さな表情や行動、一つひとつに子どものメッセージが込められているのだとA子の姿を通して改めて感じます。

私は、保育の経験年数を経るごとに学級運営や行事などに目がいきがちになり、一人ひとりの子どもが見せる姿を当り前のようにとらえてはいないだろうか、最近自分自身に疑問を抱きます。私は子どもに寄り添い、個々の特性をとらえながら保育をしたいと思っています。しかし現実には日々の生活に流され、本当の子どもを見失いがちになってしまっていることを、子どもたちは時折、私に気づかせてくれます。

子どもの姿が私に語りかけてくれること。それは、その「語りかけ」にどれだけ私が気づけ、応えられるかということ。この、「気づく力」と「応答する力」を通して、私は常に子どもから課題を与えられている者であると感じずにはいられません。

(国立音楽大学附属幼稚園 教諭)